

草の根から 世界は変わる

岸本 聡子 ①

点から線へ 線から面へ



きしもと・とみこ 1974年、東京都生まれ。2003年より政策シンクタンクNGOトランスナショナル研究所(本拠地オランダ・アムステルダム)に所属。新自由主義や市場原理主義に対抗する公共政策、水道政策の調査、市民運動と自治体をつなぐコーディネートを行う。ベルギー・ルーベン在住。著書に「水道、再び公営化」など。

や職場であり、家族である。私たち一人一人の内にも世界がある。

世界は変わっていくと受け止めるか、私(たち)が変えていくと思うかによって、「変わる」はすいぶん違うのではないだろうか。私は依然、主体的に変えていきたい。どのような変化を望むのかは人それぞれ。それを表現する自由も社会の重要な要素だろう。私の望む「変わる」を短く表現してみよう。これも弱みや私が生きやすい社会と、自然環境をこれ以上壊さずに回復させる道筋を表現する。このために私は生きていると思う。

1年間の「思索のノート」で、私の内部や周り、さらに国境を越えて出会う、小さな「変革の胎動」を表現する。最近私たちが運動の中で「トランスフォーメーション」

な「変わる」のストーリーを書こうと思っている。ときにさまざまな問題の大きさに圧倒され、革命的にすべてを変えたいという愚案に魅了されることもあるが、一気に変えようとする全体主義的な危険性を私は歴史から学んでいる。

自分内部の、また生きている地域での小さな変化の連続こそ、私は大きな変化への潜在性があると思う。変化を志向する草の根の取り組みの中に、力関係や支配構造を交える革新的な要素がある時、それは地域を超えて伝播するのかもしれない。点から線へ、線から面へ、変化が繋がって集約的な力になっていく様子を、最近私たちが運動の中で「トランスフォーメーション」

と呼んでいる。結果よりも過程に注目する概念だ。この適切な日本語が私にはまだわからない。変革と変容の間か。

変化を求める行動は時間と空間を超えて連続とつながって、時に大きな変化として現れる。例えば、昨年末ミネアポリスで黒人のジョージ・フロイドさんが白人警察官の不当な拘束で死亡させられた事件が起きた。それがきっかけとなり、「ブラック・ライブズ・マター(黒人の命は大切)」だと抗議運動が全米、世界に広がった。

怒りが爆発して多くの人が通りに出ように見えるかもしれない。が、度重なる黒人への警察の暴力や殺人への抗議行動はその前から各地で続いていた。背後には、黒人や有色人種の貧困率が高く、刑務所に入れられる確率が高く、警察に暴問されたり射殺されたりする確率が高く、教育機会や就職機会が白人と比べて著しく限られているという構造的な差別が根強く存在する。そういった状況に対して、多くの人が各地域や政治の場で長年闘ってきた。このパワーが集結したのだ。

間違いない。「怒り」は変化への力強い動力だ。私は「希望」もそうであると思っている。ブラック・ライブズ・マターの運動は、警察に巨大な予算を付けて軍隊さながらの武装化をさせる代わりにそのお金税金を有色人種の多い地域の学校や、若者のための居場所、文化・スポーツ活動支援に使って、地域の安全や治安を向上させようという運動に発展している。

さらに、意図的に社会投資が行われてこなかった有色人種の多い地域に重点的に公的投資を求め、新しい仕事や雇用を地域に作ることで、人種差別と闘う運動は他の運動とつながり始めた。

人々の怒りが、草の根でつながってトランスフォーメーションを起している。アメリカで、世界で、私の中で。

〈第4日曜日に掲載します〉

変革の胎動「怒り」動力に

私たちが取り巻く世界は絶えず変わっている。世界は国際社会だけではない。アジアや日本であり、自分の地域であり、学校

思索の ノート

間違った「怒り」は変化への力強い動力だ。私は「希望」もそうであると思っている。ブラック・ライブズ・マターの運動は、警察に巨大な予算を付けて軍隊さながらの武装化をさせる代わりにそのお金税金を有色人種の多い地域の学校や、若者のための居場所、文化・スポーツ活動支援に使って、地域の安全や治安を向上させようという運動に発展している。

〈第4日曜日に掲載します〉